

「比企西国三十三所観音霊場を巡る」

令和7年10月24日（金）

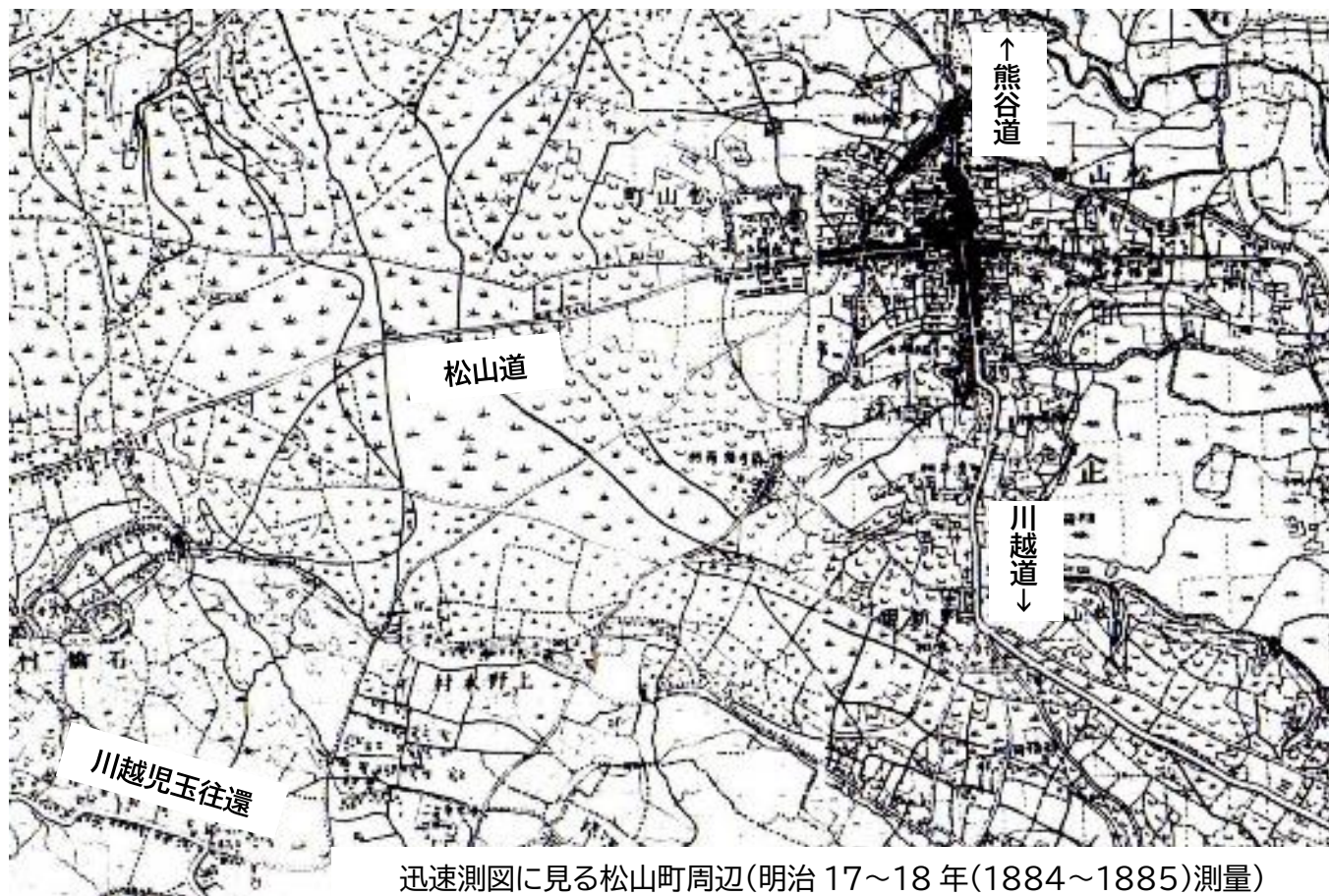
「比企西国三十三所」とは

「比企西国三十三所」は、西国三十三所を模して成立した観音霊場の一つです。江戸時代中期の享保8年(1723)に、^{おんよじょうあん}穩養浄安によって開かれたと伝わります。遠方への旅行が難しかった江戸時代には、地域の中で完結する小規模な札所巡りが多く生まれました。「比企西国三十三所」もその一つで、全ての札所を巡ると約60kmの行程となります。

比企地域の交通網と景観の変化

江戸時代から昭和に至るまでの比企地域の交通路は、「川越児玉往還」(現県道344号など)と、そこから分岐して松山に向かう「松山道」を東西の軸、そして松山の町中を通る「川越道」、「熊谷道」(現県道66号など)を南北の軸としていました。明治時代の地図では、現在の東松山市街の西側からつきのわ駅辺りまでの範囲には松林が広がり、点在する村々の周辺以外はあまり開発の手が及んでいなかったことがわかります。

国道や高速道路などの整備によって主要な交通路が変わり、工業団地や住宅地の開発が進んだ現在では、その頃の景観を想像することは難しくなりました。今回歩くのは市街地から離れた、比較的古くからあると考えられる道が中心で、比企地域の原風景を感じられる場所も多くあります。



迅速測図に見る松山町周辺(明治17~18年(1884~1885)測量)

鬼鎮神社

江戸時代の史料では「鬼神」の字があてられ、現在の表記になるのは明治時代からです。創建年代がわかる確かな史料は残っていませんが、^{はたけやましげただ}畠山重忠が菅谷に館を構えた際、鬼門封じに置かれたとの伝承があります。

全国的にも数少ない鬼を祀る神社であり、境内には金棒など鬼に縁あるものが多く見られます。鬼の持つ強い力により、「勝利の神」として信仰を集めています。「福は内、鬼は内、悪魔外」という珍しい掛け声の節分祭が有名ですが、一般公開されていた豆まき行事は、2025 年をもって終了となりました。



鬼鎮神社の絵馬

札所 24 番 法善寺観音堂

「^{みずぶさ}水房観音堂」とも呼ばれます。『新編武蔵風土記稿』水房村の項には「清善寺」と記され、十一面観音を安置していたとされます。現在は廃寺となった跡地に小さな堂が建てられており、周辺には石仏や墓地が残ります。堂に掛かる^{わにぐち}鱈口には、寛文4年(1664)の銘が確認できます。

札所 25 番 ^{みどうやま}御堂山観音堂

御堂山と呼ばれる小さな丘陵の中腹に位置します。『新編武蔵風土記稿』の太郎丸村の項に「観音堂 村持」とありますが、詳細は記されていません。また、24 番との間に位置する^{あわす}阿和須神社の境内には、「番外霊場」として聖観音堂があります。江戸時代から存在していたものではなく、昭和 50 年に、個人により建立されたことを記す石碑が建っています。

札所 28 番 菩薩堂（志賀観音堂）

川越児玉往還に面して所在し、境内には多くの石造物が残されており、嵐山町の文化財に指定されています。庚申塔の一つには「志賀^{えき}驛」と刻まれています。江戸時代の志賀村は隣の菅谷村と分担して輸送の人馬を負担しており、宿駅の賑わいを偲ばせます。

また「左 鬼神道」と書かれた石塔もあり、元の位置からは動いていますが近くにあったものと推定されます。志賀村の南端に位置するこのお堂の周辺で街道から分かれ、鬼鎮神社方面に向かう脇道があったことがわかります。



右から2番目：「志賀驛」と刻まれる庚申塔
右から3番目：「鬼神道」と刻まれる地藏尊

札所 26 番 多田堂(長慶山東昌寺観音堂)^{ちょうけいさんとうしょうじ}

多田堂は、江戸時代に菅谷村を所領とした旗本岡部家が、宝永3年(1706)に家臣であった多田重勝に命じて建立させた堂です。徳川秀忠の乳母を務めた「岡部局(大姥局)」^{おかべのつぼね おおうぼのつぼね}は岡部家出身の人物で、多田堂にはその持仏^{じぶつ}であった千手観音像が祀られていたと伝わります。

元は別の場所にありましたが、昭和10年(1935)年に発生した「菅谷の大火」のために焼失し、当時多田堂を管理していた東昌寺の境内に仮堂として再建されました。後に建物が新築され、現在に至ります。

東昌寺境内には2基の古墳が所在し、そのうち1基には板碑がまとめて置かれています。東昌寺は、菅谷館跡の東側にあったとされる長慶寺に由来を持ち、寛文年間の始め(1660年代)に現在地に移転したと伝わります。板碑は東昌寺の移転前から周辺にあったものと考えられ、古くからの供養の場であったことがうかがえます。

多田堂旧所在地

現在の菅谷自治会館に隣接して、多田家の墓地が所在します。墓地に残る石碑からは、宝永3年(1706)に、この場所に多田堂が建立されたことがわかります。石碑は多田重勝の子、英貞が寛政9年(1797)に建てたものです。多田堂の建立を命じた岡部家は、安永元年(1772)に所領を没収されたと『新編武蔵風土記稿』に記されており、堂の由来を知る者がいなくなることを惜しみ石碑に残したのではないのでしょうか。

併せて、多田堂以前にはここに長慶寺という寺院があり、菅谷館跡の隣にあった同名の寺院が移転したものと伝えています。前項で紹介した東昌寺の由来と関わる内容です。また、札所21番の長慶寺も流れをくむ寺院であるとされ、畠山重忠の位牌が安置されています。



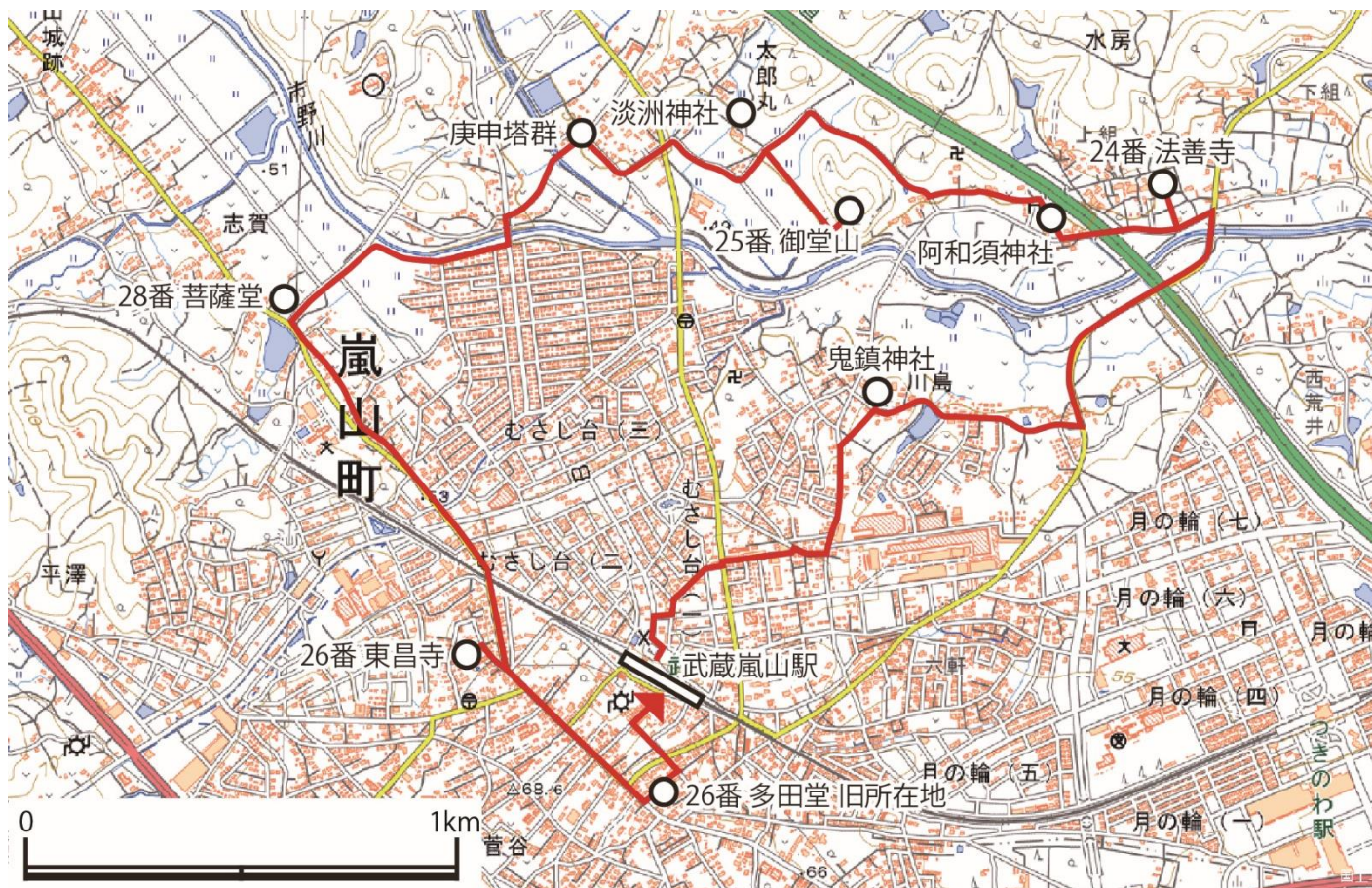
武蔵國比企郡菅谷村者畠山重忠之
墟也方其盛城備置佛寺曰長慶至中
世遷於此云寛永中岡部某公受邑是
地有故廢寺寶永三年丙戌遂以其址
賜先太夫多田重勝命永為塋域乃安
千手大士名多田堂沒則葬焉子英貞
嗣月以其沒日會衆誦普門品已十三
萬餘卷先是岡部氏滅而英貞土着不
徒今茲建石勒概銘曰
維春維秋維石維悠
寛政九年歲在丁巳夏四月十九日
多田英貞一角甫誌

多田堂の由来を記す碑と翻刻

あわす 淡洲神社(嵐山町太郎丸)

『新編武蔵風土記稿』の太郎丸村の項に「淡洲明神社 村の産神なり、村持」とあります。淡洲神社は、県内では滑川町に集中して分布します。浅間神社(滑川町福田)から出土した宝徳2年(1450)銘の鰐口に「阿牙洲大明神」と刻まれており、中世にまで遡る、この地域と深く結びついた信仰であったと言えます。

太郎丸村は、隣接する水房村(現・滑川町)から分かれる形で江戸時代前期に成立しました。水房村にも「阿和須神社」が所在することから両社の関係は深いと推定できますが、詳しいことは明らかではありません。



本日のコースと見学場所



比企西国三十三所の関係資料(左:一覧表 右:地図)
※当館 HP から PDF をダウンロードできます。



アンケート